

ならの木便り

もうすぐお遊戯会



10月23日の運動会は、コロナ禍の影響を受け、今年もプログラムを短縮して行いました。そんな状況でも子どもたちは屈託なく、日頃の練習の成果を発揮して晴天のもとで生き生きと活躍しました。大勢の人たちの前で堂々と振る舞う子どもたちは、大きな行事を一つずつ乗り越える度に成長していくのを感じます。

12月にはお遊戯会に臨みます。今は、毎日行うチャレンジタイムやお稽古事などに加えて、その練習に取り組んでおります。そんな気ぜわしい日々ですが、年少組や年中組は、お遊戯等の練習をとっても楽しんでいるようです。

年長児は劇を行います。毎年、自分で演じたい役を子どもたちに選ばせますが、当然のことながら全員が望みの役に就けるわけではありません。

脇役がいなければ主役も無くなる、そして劇は成り立たない、どのような役でも、主役と同じように大切なのだと言うことを意識して欲しいと思っています。

劇は、社会の仕組みとよく似ていると思います。どのような人でも社会の構成員として大切な役目を担っているのですから。そのようなことは、こんな幼い子どもたちに分かるはずありませんが、どのような役を演じて、ひとつの劇を行うには、全員が力を合わせなければならぬことを、おぼろげながら感じて欲しいと思います。

何年前のことだったか、記憶は定かではありませんが、今は閉園になった内郷幼稚園で心が痛む思い出があります。

ある年のお遊戯会のことでした。その時は担任が『白雪姫』を選びました。

その時も、それぞれ園児の意志で役を決めたはずでした。当日、すでに劇が始まり、いよいよ出番と言うときに、魔女役の園児が、「出ない」と言って泣き出しました。どうしようもなく、当時の担任がピンチヒッターを務めたことがありました。それまでは一生懸命練習に励んで、上手に演技ができるようになっていたし、役を無理に押しつけた様子もなかったのに、担任も気がつかないのかも知れません。また、悪役を好んで引き受ける子もいるので、ベテランの教諭だった担任も、見極めきれなかったのでしょう。どんな心の動きがあったのか分かりませんが、当日まで、何とかその役目を果たそうとして頑張ってきたであろう努力に、何とも言えない気持ちになりました。

もっと気を配っていたら良かったのか、或いは防ぎようがなかったのか分かりません。今年は、幼稚園のホールを跳びだして、もみじホールの舞台上で演じます。

舞台稽古無しで臨む本番に、子どもたちはどのような感動を与えてくれるのでしょうか。どんな形にしろ、それは子どもたちの成長を見守る保護者の方々始め、私たちにも素晴らしいクリスマスプレゼントになることでしょう。

来場して頂く皆さんには、日頃の練習の成果を精一杯見せるであろう子どもたちに、沢山の拍手を送って下さるようお願いいたします。それが、励みとなり、良い思い出となるように。

浜野和子